

「大きく変わる東北農業を支えるために」

私どもは、戦後、農林水産省東北農業試験場として発足してから、一貫して東北地域の冷涼な気候に適した作物品種の開発と冷涼条件の克服・利用を念頭に置いた栽培技術、生産性の高い畜産技術の開発等に取組んできました。

現在、東北地域の農業振興における喫緊の課題は、農業従事者の減少と急激な高齢化に対応した農業技術の開発および農業を通じた地域社会発展方策の提示です。既に、後継者が確保できない農業者は、地域の専業の農業生産者に耕作作業の大半を委託せざるを得なくなっています。統計資料を見ると、近い将来は岩手県内でも、周辺の農地での農作業を請け負うなどにより耕地面積100㌔、あるいはそれ以上となる大規模農業経営が、大宗を占めることとなります。しかし、1区画30㌔(100m×30m)単位の水田からなる数ヘクタール規模の典型的な家族経営の農作業体系、すなわち乗用田植機や小型のトラクターで行う中型機械化体系の農作業では、15㌔の規模を超える農作業の工程に支障をきたし、収益も頭

打ちになってきます。これを打破するには、作業の隘路となつている水稻の育苗と代掻き、移植(田植え)を省略し、水田に直接種を播いて栽培する直播技術がコア技術として欠かせません。当センター開発のプラウ耕乾田直播技術はその一つであり、大幅な省力化が可能で畑作用農業機械との共用によるコスト削減効果も高く、平坦部の大規模水田作経営への普及が始まっています。稲作における省力化やコスト低減に加え、さらに転作作物として何を導入するかも収益性向上には重要なポイントになります。これまでのように水稻と麦類・大豆・飼料作だけでは不十分であるため、当センターでは露地野菜を導入した経営体の育成をめざしています。特にタマネギ・キャベツ等は国内産地の端境期が東北地域の栽培適期となる可能性が高いことから、機械化体系開発も含め、東北各県と連絡試験を進めているところです。

水稻以外に畑作物をかかなりの割合の水田で栽培せざるを得ない状況は今後も続きます。一方で、湛水管理する水稻と異なり畑

作物を連作し続けると地力が減耗することが実態調査で判明しました。地力の維持・向上にとって堆肥の活用は不可欠ですが、岩手県では畜産業が盛んなものの、堆肥となる畜産排せつ物資源が水田に十分還元できていないのが実情です。近年、畜産振興に向けて、国際情勢等により供給不安のある輸入飼料への依存を軽減していく必要性が指摘されています。水田を活用しトウモロコシ等の飼料作物を栽培するとともに、排せつ物を適正に農地に還元させる総合的な体系構築が望まれます。

農業振興を地域の活力の維持発展につなげていくには、農作物生産から加工販売までを地域内で行い、生じた付加価値と新たな雇用で地域をより活性化させる、いわゆる6次産業化も視野に入れた研究を推進していかなければなりません。試験研究機関や行政、JA等の関係機関はもとより、これまで以上に地域の実需者の方々とも連携を取りながらそれらの研究に取り組んでいく所存です。今後ともご支援、ご協力を賜りますよう宜しくお願い致します。



国立研究開発法人 農研機構
東北農業研究センター 所長

石黒 潔